

「わたし」の所在： Lyndall Gordon の auto/biography の試み

早川 敦子

序：「わたし」を語るということ

伝記作家として著名な Lyndall Gordon (1941-) は、「女性の生涯は、伝統的な伝記の轍からは外れている。……その生涯を何よりも特別なものになっているものは、隠されていることにこそあるということだ」¹と記す。「隠されている」とは、すなわち「衆目の注視を浴びていないということだけでなく、女性たちが自らを守るために、あるいは (Dickinson が語っているように) 自分の中にある『爆弾』に向き合うことから自身を守るために、光が当たらぬ場所に隠されている」領域である²。それは George Eliot が言う「私たちの中にある地図のない場所」だと Gordon は指摘し³、彼女をしてさらに Mary Shelley、Emily Brontë、Olive Schreiner、Virginia Woolf を加えた5人の女性たちの伝記 *Outsiders: Five Women Writers Who Changed the World* (2017、以下略記 OS) を纏めて、「自己発見と、轍を外れた道を通して、歴史の石の下からひそかに姿を現す未だ未承認の存在、新たな人格をそこに立ち現わせる」⁴ことに成功した。一人の人間としての T.S. Eliot、Henry James、Emily Dickinson らの生涯を伝記で追ってきた Gordon は、OS を通して女性の表現者たちの群像を描くことで、体制の轍から敢えて逸脱して果敢な生のありようを後世に繋げた彼女たちの領域を詳らかにしたと言える。隠された領域にあったものに注視し、沈黙から聴こえてくる声を現代に伝える伝記作家のありようが、そこに透視されてくる。

このような Gordon の伝記作家としての意識の根底には、やはり伝記作家でもある Humphrey Carpenter との対談でも明らかにしているように、伝記を書く行為を通して他者の隠された物語に取り組みながら、「完全な真実を語

ることは、自身の人生においてもそうであるように、不可能なこと」⁵だという認識がある。本論でも検証する伝統的な「伝記」が真実あるいは事実を問題として展開してきた一方で、とくに New Criticism 以降テキストが独立した存在として読まれることで、「真実」は読みの行為の中で構築されていくことになる。伝記やさらに自伝もまた、ステレオタイプ化されたテキストから開かれた作品へと変容してきたのではないか。Gordon の立ち位置は、そのような新たな領域を見据えて読者をも巻き込んだ物語の共有を促していると言えるだろう。

このような意味で、彼女がいわば「日陰」の存在に目をとめ、偉大な人間の生涯ではなく、「私たち」に繋がる小さき者たちの人生から物語を立ち上げらせる伝記に挑戦していることはきわめて興味深い。故郷南アフリカの3人の少女たちとの友情とその短い生涯を描いた *Shared Lives: Growing up in 50s Cape Town* (2005, 以下略記 SL) は、「過去のいわゆる標準とされる歴史、伝記、回想記の背後にある、目もとめられぬまま隠されている名もなき女性たちの沈黙に、どのような可能性が未完のまま横たわっているのか？」⁶と鋭く問いかける。彼女はそこで従来の伝記では描けない「隠された女性の人生の領域」を「手紙、日記、個人が語る歴史と公共の歴史、夢などを織り交ぜた新しい形式を編み出して、最大限の緊張と創意で以て、1950年代から60年代の南アフリカ社会で生きた女性たちの限られた人生に表現を与えようと試みた」⁷。その試みは、新たな伝記の手法の実験のみならず、伝記という言葉がもたらしうる文学としての可能性を示唆するものではないだろうか。ポストコロニアル批評を迂回して、抑圧されていた側の小さき者たちの声が言説化され、隠れされていたものの存在に光が当たっていった道程と同様の過程を、そこに重ねることができる。たとえば、「『権力の外に置かれた』女性について書く女性として、Gordon は伝記と自伝という『言語』を駆使して、複層的な関係性から見えてくる[既存の]伝記の権威主義を突き崩した」⁸と評価されている。

アパルトヘイト下の南アフリカで少女時代を過ごした Gordon の経験は、母親を回想する *Divided Lives: Dreams of a Mother and Daughter* (2014, 以下略記 DL) にも紡ぎだされる。回想記という「伝記」を書く営みは、同時に Gordon 自身の「自伝」に重なってくる。人知れず南アフリカの地で詩を書きながら、それを幼い娘に読んで聞かせた母の「隠された領域」を辿りつつ、まさに「分かたれた人生」を歩んでいった娘は、自らの「隠された領域」に踏み込んで、過去の自分と老境に至った現在の自分を繋いでいるように思える。

それは過去の自分を対象にした自己翻訳の試みに他ならない。他者を語りつつ自己を語り、他方で自己を他者として語る、それは自身の「所在」—「わたし」の所在—を他者を基軸にした遠景から捉えなおすことでもある。

本稿では、このような Lyndall Gordon の伝記の試みが照射する翻訳的要素を射程に入れながら、近年活発な議論が展開されている「伝記・自伝」研究の可能性を考察する。その中で、Gordon もすぐれた伝記を書いた Virginia Woolf を原点におき、モダニズムの旗手としてだけでなく、「書く女」の水脈を現代に繋いだ Woolf の存在にも光を当て、その後どのような可能性が拓かれてきたのか、現在に至る「わたし」の所在をめぐる言説を考察する。

I. 「伝記・自伝」をめぐる転回

「伝記・自伝」(auto/biography) の多様な定義に立ち返るとき、通底する基本的な概念は、それが“Life Narrative”として捉えられるということである。自身も伝記作家である Hermione Lee によると、「biography (伝記) とは、他者によって語られた、或る人間の story (物語) である、なぜ、account (説明) ではなく、story なのか？ それは、biography は事実の羅列ではなく、narrative (ものがたること) の形態をとるからである」(Lee, 2009, p.5)。つまり、他者の人生を対象に自分の言葉で「ものがたる」物語ということになる。そして「自伝」についていえば、対象が他者の人生ではなく、自身の人生になり、自身を他者として語る物語、ということになるだろうか。さらに言えば、Life Narrative として自分の人生を語る「わたし」は、「語りの行為を通して主体として語ると同時に、自身を客体として精査し、記憶し、思考している」(Smith and Watson, p.1)。語源からみると「autos はギリシャ語で self を指し、bios は life、graphie は writing を意味している」(同) とされ、啓蒙主義の称揚と読者層の拡大を背景とする 18 世紀までに、きわめて西洋的なジャンルとして確立された⁹。そこで「歴史」が語られ、思想が語られ、時代が語られることで、自ずと Life Narrative は個人の領域から西洋の近代を形成する意味を付与されたジャンルに拡張していった。

ところが、ポストコロニアル批評を通して西洋中心主義そのものが問い直され、ポストモダンの「ナラティブの転回」(早川敦子、『翻訳論とは何か』第 3 章参照) から「大きな歴史」が解体されて「小さな物語」が照射されるに至って、従来の「伝記・自伝」(auto/biography) の意味への疑義が呈示されていく。

たとえばマイノリティの言説、奴隷文学、女性の日常生活の記録や手紙、手記、ホロコースト生還者の回想など、Life Narrativeの領域は言語文化的にも一気に拡大する。「伝記」では、例えば南アフリカで幼少期を過ごしたオランダ系イギリス人で、ポストコロニアル文学をさらに世界文学へと繋ぐ理論に展開してオックスフォード大学の初の「世界文学」の教授となったElleke BoehmerがNelson Mandelaの伝記 *Nelson Mandela* (2008) を著し、西洋の価値観と闘う人間の姿を描く Life Narrative を通して「他者」の存在領域を広げた。

「自伝」には多様な例が挙げられるが、顕著なのはやはり Elie Wiesel をはじめとするホロコースト生還者が、沈黙のなかから語り始めたことは非常に重要である(早川敦子、『翻訳論とは何か』, pp.150-1 参照)。沈黙から語り始める多くの者たちがそれに続くことになっただけでなく、フィクションを含む新しい文学の展開を促すことになったからである。カナダの作家 Anne Michaels の *Fugitive Pieces* (1996) では、登場人物たちが「ものがたる」他者の記憶の「回想記」が手法として使われ、フィクションの領域でホロコーストの歴史を描くモチーフとして「自伝」が複層的な言語空間を構築している(早川敦子、『世界文学を継ぐ者たち』第2章参照)。ここで重要なことは、世界の翻訳地図が書き換えられていく過程で、「伝記・自伝」文学がそこに参画して、新しい領野が拓かれたということである。

II. Virginia Woolf の実験：伝記かフィクションか

文学形式としての伝記・自伝が、時代の社会観や世界観と連動して変化を遂げていく過程で、モダニズムの旗手として、また女性の言説において先駆者となった Virginia Woolf (1882 -1941) は、皮肉にも *Dictionary of National Biography* の編集主幹を 1886 年から 1891 年まで務めた父 Leslie Stephen (1832-1904) への反抗という観点からも、興味深い存在だと言えるだろう。従来 of 伝記のありようを批判したエッセー “The New Biography” (1927, *Collected Essays*, Vol. IV. 所収、以下略記 “NB”) では、同世代の Harold Nicolson を例に挙げ、人間の自己を物語ることの困難さへの自覚が、伝記作家をして「伝記」を通して自身の自己探求へと舵をきりはじめた変化を鋭くとらえ、「ヴィクトリア朝の伝記の時代は終わった」(p. 233) と述べる。そして事実よりも個人の人格への心理学的解釈に重心をおく Lytton Strachey の *Eminent Victorians* (1918) が「ヴィクトリア朝の価値観への批判」としてまさに「新しい伝記」の画期的傑作だと観る Woolf の評価は、「伝記の芸術的次元を重視してそこに小

説と伝記の共通性を見出す」変化を通して20世紀において「文学」としての伝記の可能性を拓いた (Marcus, pp. 91-2)。Woolf 自身の実験の画期的作品の一つが、「伝記」という副題を冠して実在の人物 Vita Sackville-West をモデルとした「小説」、*Orlando: A Biography* (1928) であった。

Orlando: A Biography の逆説

すでに作家としての名声を博していた Woolf が、多感な時期に死別した母の回想を *To the Lighthouse* (1927, 以下略記 TLH) の登場人物 Mrs. Ramsay に託した「伝記的」試みに取り組みながら、他方で一時同性愛関係にあった Vita Sackville-West を異色のファンタジーとして—しかも「伝記」と題して—描き出したことは、形式としての「伝記」への彼女の関心を物語っている。同時期の“NB”で彼女が問題として挙げていることの一つに、「事実の真実」(truth of fact) と「フィクションの真実」(truth of fiction) という相矛盾する二つの要素を繋ぐことが伝記作家の仕事であり、それを「花崗岩と虹の融合」と呼んでいることがある (p. 155)。先述の「芸術としての伝記」は、まさに「フィクションの真実」を重視する Woolf の姿勢を反映していると言える。伝記の創作は、実人生すなわち事実という実像を、フィクションという虚像を通していかに真実に昇華させるかという芸術上の問題であったに違いない。実に400年を生き、性も男性から女性へと転換する主人公 Orlando という虚像を敢えてファンタジーという枠組を与えることで逆説的に「フィクションの真実」に導こうとした Woolf の試みは、まちががなく大胆な実験であった。Kathryn Hume の言葉を借りれば、「ファンタジーは現実から脱却しようとする文学の根本的な衝動」(Hume, p.21) であり、モダニスト作家としても、ヴィクトリア朝的な家父長制の伝統から踏み出そうとする「新しい女」としても、Woolf には実に有効な変換ツールであったことは想像に難くない。

語り手である「伝記作家」は、この変換ツールを自由に操り、時代の変遷をパロディとして映し出す文体の変化が、その時代に翻弄されるかのように生きる Orlando の意識を彼／女の体験として浮上させる。メランコリックな文体で展開されるエリザベス朝では女王の寵愛を受けた美少年 Orlando が詩を吟じ、時代変わって散文的なヴィクトリア朝では女性となって、相続権をもたない性の呪縛のもとでその不条理を嘆く。やがて20世紀を迎え、「彼女」はずっと書き続けながら未完でしかなかった詩「樅の木」を完成させる。奇しくも「彼」から「彼女」への変身は、英文学において「書く女」の登場を象徴的に予言したと読み解くことができるだろう。実にその誕生までの苦難の道

のりは、時代の現実と、個人の人格として描き出される Orlando の内面世界との衝突と軋轢に重ね合わされる。緊張を孕む「ものがたり」は、伝記作家が Orlando の伝記を書き進めながら、時空のみならず性の境界を超える両性具有的な人間存在を浮かび上がらせた。女性に変わった Orlando を、伝記作家はこう語る。

The difference between the sexes is, happily, one of great profundity. Clothes are but a symbol of something hid deep beneath. It was a change in Orlando herself that dictated her choice of a woman's dress and of a woman's sex. And perhaps in this she was only expressing rather more openly than usual – openness indeed was the soul of her nature – something that happens to most people without being thus plainly expressed. For here again, we come to a dilemma. Different though the sexes are, they intermix. In every human being a vacillation from one sex to the other takes place, and often it is only the clothes that keep the male or female. (*Orlando*, pp.171-2)

伝記作家は、ここで Orlando の変化を性をめぐる深遠な「真実」として語っている。Orlando についての「かたり」の領域を踏み越えて、人生について、人間について語ることで、従来の性の規範に対して新たな視点を投げかけているのである。ファンタジーの枠組みを使うことで、男性／女性、事実／想像、実像／虚像というような二元論の境界を無化している。

伝記作家の対象に対する「自由」を“NB”で重視した Woolf の視点は、伝記作家の「ものがたる」行為の領域を押し広げて、対象を語る主体の声を作品に介入させている。これは、翻訳論的にみると、翻訳者の存在が黒子から可視化されてきた変遷を想起させる。翻訳されたテキストが独立した作品世界として独自の意味を構築する「自由」を獲得したことに鑑みれば、伝記もまた「事実」から「芸術」へと基軸を変位させることでもたらされた新たな意味が示唆されてくるように思われる。既存の意味に異なる光を当てることで問い直し、異なる文脈で再創造する自由が翻訳者にも伝記作者にも与えられたとき、そこに別の可能性が拓かれる。Woolf がこだわった「フィクションの真実」とは、このような可能性を示唆するものであったと言えるだろう。伝記の対象そのものを越えて、現在の視点から過去を検証し、そこに「変化」の兆しを顕現させていく方向が見えてくる。それは刻々と変化を遂げる時間の経過に意味を見出し、「過去」へと向けられた目は、翻ってそこから「未来」へと伝記・自伝のテキストの読みを導いていくことになる。

「フィクションの真実」から女たちの領域へ

Orlando の執筆の前後に、Woolf は先述のように自伝的要素を色濃く反映させた *TLH* と、両性具有の理念にも踏み込むフェミニズム論 *A Room of One's Own* (1929, 以下略記 *ARO*) に取り組み、時代の中で日陰の領域におかれてきた「女性」の存在と表現に光を当てている。「表現者」としての *Orlando* の背後に、作家の成功を夢見た *Vita* の姿があったことも偶然ではないだろう。*TLH* では *Mrs. Ramsay* の存在をキャンバスに表現しようと苦闘する女性画家 *Lily Briscoe* が登場し、*ARO* には女性が社会の中で居場所を与えられぬ時代ゆえに才能を開花できずに悲劇的運命を辿らねばならない *Shakespeare* の妹が姿を現わす。歴史の中で消去されたに違いない無名の女性たちの群像が、Woolf のペンによって描き出されたフィクションの真実を通して、歴史の陰から導き出されてくるのだ。

男性によって構築されてきた歴史を基盤に日が当たる人間の生涯をたどる伝記の伝統に、Woolf は異議申し立てをしたのだ。「陰」の伝記ものごとりで言えばよいのだろうか、従来の伝記が描きだす人間像の背後に、「フィクションの真実」を通して異なる人間の側面と内面のリアリティを立ち現わせた。*Orlando* の謎めいた人間像は、彼／女の詩人の誕生の「ものがたり」であり、時代との軋轢は歴史のパロディとなって英国史を再読する。その後も、飼犬の視点から *Elizabeth Barrett Browning* を「ものがたる」*Flush* (1933) で伝記の形式を試み、「NB」に続いて“The Art of Biography” (1939, *The Death of the Moth* 所収) では、*Bloomsbury Group* の同志でもあった *Lytton Strachey* の伝記に焦点を当てて「伝記は芸術か否か」(p.121) という議論を展開している。そして“The Lives of the Obscure” (1938, *The Common Reader* 所収) に至っては、「名前なき墓石」からその下に眠る忘れ去られた亡霊を呼び覚まし、例えば「書く女」の先駆となった *Laetitia Pilkington*¹⁰ が自作の詩を織り込みながら記した自伝に光を当てている。

興味深いことに、Woolf のフィクションの実験、例えば6人の登場人物の幼少期から老境に至る人生を追う *The Waves* (1931, 以下略記 *TW*) や、*The Years* (1937) の前身 *The Pargiters* での家族の「歳月」を「ものがたる」枠組みにも、伝記的関心が透視される。しばしば Woolf の分身として捉えられる *TW* の *Bernard* は、人間の人生を言葉で記録することに挫折し、拾い集めた言葉を書き記したノートと決別する。繊細で、子どもの頃に水たまりを飛び越えることができなかつた *Rhoda* は、人生半ばで自ら命を絶つことによって自身の物語を沈黙の領域に消去させてしまうが、彼女の人生は、この *Bernard* の

ノートに遺された言葉によって他者の記憶の中に居場所を与えられる。名もなき人間の存在は、「ものがたる」行為によって忘却から救い出される。

女たちの存在は、まさしく伝記的な注視を通して可視化され、そこで描かれる生のありようは、Laura Marcus や Lyndall Gordon も指摘する Woolf の労働者階級の女性たちの自伝への関心—“Memories of a Working Women’s Guild” (1930, *The Captain’s Death Bed* 所収)—と繋がってくる¹¹。1883年に創設された Working Women’s Guild の女性たちが記した自伝的手記の序論として寄稿されたこのエッセーで、大学創設に向けて動き始めていた中産階級の女性たちとは異なる階級の働く女性たちの連帯が、「ずっと続く願望と夢の磁場となり、結節点となった」(pp. 221-2)と Woolf は評価する。「書く女」の存在に目を注ぐ一方で、日陰の女性の生が厳然と存在する「事実」とどう向き合っていたのか、時代の変遷の渦中であってフィクションと現実を繋ごうとする Woolf の意識が、作品の随所に読み取れる。

時代が大戦へと突入していく「現実」と直面しつつ、Woolf は自ずと「歴史」にも鋭い眼を向ける。従来の伝記への疑義は、個人の歴史を語る言説から映し出される社会の規範や時代精神への批判とあいまって、人間の歴史とは何かを問いただす。美術史に革命を起こすことになった Roger Fry の伝記執筆に苦戦していた彼女は、同時期に最後の小説となった *Between the Acts* (1941, 以下略記 BA) で、英国の歴史を村人たちが演じるパジェントで描き出す試みを作品に取り込む。ここでも、有史前の太古の時間に思いを馳せる Mrs. Swithin や、「現在」を割れた鏡の断片で表象しようとする演出家 Miss La Trobe など、男性原理には不在であった視座を女性たちが招き入れる。Woolf が描く女たちは、フィクションを通して居場所を獲得し、女たちの領域が可視化されていった。

Ⅲ. Lyndall Gordon の Virginia Woolf 伝

“A Writer’s Life” という副題を冠して Lyndall Gordon が上梓した Woolf の伝記 *Virginia Woolf: A Writer’s Life* (1984, 以下略記 VWWL) は、T. S. Eliot の優れた伝記作家としてすでに名声を博していた彼女の新たな試みでもあった。文学としての伝記に関心を持ち続けていた Woolf を対象にして、その生涯を辿る方法ではなく、作品世界の解釈を基軸にして、その源流に関わる「記憶」に彼女がどのように応えているかに焦点を当てている¹²。Woolf が一貫して人生の不可知性を照射したように、Gordon もまた、遺されたおびただしい

手紙や日記から事実を掘り起こすことよりもむしろ、「自身の体験が最も忠実に表わされているのが小説である」(*VWWL*, p.6) とする Woolf 自身の見解に立って、まさに「フィクションの真実」に迫ることから Woolf 像を描き出す。Gordon は、「日記や回想と照らし合わせてみると、小説のなかには、まさに Woolf 自身の人生において決定的となった瞬間が記されている」(同) と指摘し、作品の優位性から「こうであるかもしれない」可能性を導き出す「伝記」を意図していることがうかがわれる。続けて、「その瞬間を追うために、他者の目に映る Woolf ではなく、彼女自身に認識された自己像を追うことを試みる」(同) と宣言し、Quentin Bell らのウルフ伝とは異なることを明確にしている。

果たして、*VWWL* は、Woolf の人生の軌跡を辿る構成をとらず、作品も時系列で登場してはいない。伝記作家の自由を十全に発揮して、Woolf の記憶の原点にある「ヴィクトリア朝の人々」から書き起こし、その記憶に Woolf がどう抗い、そこから自己翻訳を経て表現者として応答していったのかを「狂気」も含む彼女の内的世界を読み解くことに展開させ、作品世界に描かれた人生を「自由」や「歴史」、「芸術家の誕生」や「声なき者たちの声」というようなテーマで読み解いていく。

「歴史」への異議申し立て

Gordon は、上記のような方法論に沿って Woolf の作品と思索を往復しながら、彼女の人生のテーマを引き出してゆく。例えば前節でも触れた *BA* の現実の戦争への突入に直面した喫緊の「歴史」への異議申し立ては、すでに前期の小説 *Jacob's Room* (1922, 以下略記 *JR*) の「将来を囑望された若者の未来が戦争によって潰える小説形式の伝記」(*VWWL*, p. 168) に掬い取られている。1906年に早世した兄 Thoby Stephen の影を「実体のある、自室で本を読む若者に変換することで、記憶を芸術に変える」試みに、「想像の伝記」の形式で取り組んだのだと Gordon は読み解く(同)。「Jacob の死の場面は不在なのに、作品全体が死を予言している」(同)。息子の死のあとに彼の学寮の部屋を訪れて、もはや主のいない靴を手に途方に暮れる母親の姿は、残された者の悲嘆をより鮮明に意識化させることで「死」をものがたる。あるいは、彼女の記憶に残る少年時代の息子が、スカーバラの海辺で見つけた、白骨化した動物の頭蓋骨のイメージ。伝記作者は、Jacob の実像よりもむしろイメージに導かれる虚像を描き出すことで、人生の不可知性と謎を前景化し、「挽歌というジャンルに新しい表現形式を与えた」(同, p. 169) Woolf の意図の背

後に、戦死した多くの若者たちの死を重ねて、輝かしい戦勝の歴史の虚無が示唆される。

このモチーフは後期の *TW* の *Percival* にも反復されるのだが、*Mrs. Dalloway* (1925, 以下略記 *MD*) に登場するシェル・ショックに囚われた *Septimus* もまた、自死によって現実への強烈なアンチテーゼを読者に投げかけた。

Gordon は、*TLH* の過ぎ行く時間にも人為的な歴史への異議申し立てが「戦争という闇の比喩」(同, p. 161) に包み込まれていると言う。「奇妙にも人間が登場せず」、無秩序に人間の空間に侵食してきた自然の沈黙に、「歴史や新聞で記念すべきこととして取り上げられてきた物事への批判」(同) を込め、「『時は過ぎゆく』の章で、*Woolf* は歴史を書き直した」(同, p. 162) と解説する。当時の日記の記述を引きながら、Gordon は *Woolf* の一貫した歴史への視座を作品に読み解き、*TLH* についてはこう結論づける。

So, at the end of the war, old crones repair the Ramsay home, the abandoned, rotting bastion of Victorian culture, and then, the artist, Lily Briscoe, returns to paint a remembered picture. The activities of the old crones and the artist are reciprocal in that they are the preservers of the past. As the crones sift the Victorian relics, so the modern artist sifts those qualities of the age that must be preserved, from the clutter of outworn beliefs that may safely pass into oblivion. In the wake of the war, Virginia Woolf was doing precisely this. (p. 164, 下線筆者)

TLH の中に、*Woolf* は女性の手を通して歴史を「より分け」、次世代に繋げる営みを描きだし、自身もその役割を果たしたのだ。

伝記の最終章 “A Public Voice” で、Gordon は *Woolf* の最後の作品となった *BA* と未完の評論 “Anon” を取り上げ、「*BA* も “Anon” も、過去の堆積物から保存すべき英国をより分けて、未来に手渡そうとしたものだった」(同, p. 271) と記している。彼女の「役割」が自死によって最後まで遂行されえなかったとしても、激動の時代の狭間に未来に繋がる一筋の領域を「作品」から切り拓こうとしたのは、まちがいないだろう。

最後の短編 “The Symbol” (1941, *The Complete Shorter Fiction of Virginia Woolf* 所収) で、雪山を滑落していく登山隊の姿をバルコニーから傍観するほかなかった老女の姿は、時代の中で命を奪われていく若者たちをペンで救うことができなかつた *Woolf* の絶望にも似た心情と重なる。それは大きな喪失であったと同時に、*Woolf* を通して記された「墓標」となって、たしかに次世代

に手渡された。「Woolfの『陰』の領域を追う伝記」(VWWL, p. 280)を通して新たな Woolf 像を文学史に加えたことは、伝記作家 Gordon の大きな功績でもあるだろう。

Gordon の「伝記」、すなわち Woolf をめぐる「陰のものがたり」を、現代の読者は想像力で繋げていかななくてはならない。翻れば、読者は Gordon の伝記を通して、Woolf の作品を読んでいるとも言えるだろう。ここでは「歴史」への異議申し立てという観点を引き出すにとどめたが、「書く女」という文脈は、のちに OS で Gordon に再読されることになる。現在の伝記作家の視座から、過去がまた姿を変えて立ち現れる。

IV. 「自己」の変容がもたらしたもの

Woolf の「陰」の領域に注視した Gordon の視点は、Freud の深層心理学的アプローチによる「無意識」の存在を想起させる。自己とは、意識によって明確に捉えられるものではなく、むしろ「意識の領域の外から引き起こされる『自己』の攪乱と再編」によって「アイデンティティや経験を意識的に統御するという幻想は絶えず脅かされ」、それが伝統的な伝記の前提にある「普遍的な『自己』という概念—自己発見や自己実現、自己認識」を崩すことになった (Smith and Watson, p. 201)。すなわち、啓蒙主義を背景にした人間観の信ぴょう性が失われることによって、伝記・自伝の前提も修正を余儀なくされたのだ。揺るぎない自己などは存在せず、自伝で探究される自己認識の「真実」も保証されていない。この認識の変化は、書き手の意識に修正を迫るのみならず、読者の「読み」にも影響を及ぼし、ひいてはジャンルとしての伝記・自伝に変革をもたらすことになったのは理解の及ぶところだ。伝記・自伝研究も、畢竟活性化する。

そのような変化に加えて、「ポスト構造主義とポストモダンの理論が 1970 年代から 80 年代にかけて主体とは何かを議論することで、主体の認識とともに自伝的な行為も再定義される」ことになる (Smith and Watson, p.204)。Smith と Watson によると、「伝記・自伝」研究に介入してきたのは、Freud の精神分析学を援用した Lacan が問題とした「自己の分裂」や Derrida の「差延」の概念、Lyotard が理論化した「マスター」ナラティブの解体に連動して暴かれた大文字の「真実」(Truth) の幻想、事実とフィクションの境界の揺らぎ、Foucault の権力をめぐる議論、Bakhtin の対話理論から導かれる、独立した単独の自己ではなく複層的に語られる「私」の多重性、文化人類学による、

西洋の外から西洋的一元的価値を批判する議論、「女性」の多元的なありようを語るフェミニズム理論、異種混濁性を前提とする文化批評やクィア理論など (Smith and Watson, pp. 204-5)、多様な領域にわたる学際的な批評理論である。このような議論の介入によって、伝記・自伝研究にも「『主体』をめぐる大きなパラダイム・シフトが起きた」(同) 道程を、実際に具体的な研究例を挙げて Smith と Watson は *Reading Autobiography: A Guide for Interpreting Life Narratives* で概観しているのだが、少なくともこの変化がもたらした重要な伝記・自伝の可能性は、それが独立した文学作品としてのテキスト性を付与されたことではないだろうか。

すでに Woolf が認識していた「芸術」としての伝記・自伝の要素は、対象を「語る」伝記作家の「自由」を必然として捉えることの上に成り立っている。JR でも、*Orlando* でも、語り手はしばしばメタフィクションよろしくテキストの虚構性を読者に意識させるかのように顔を出し、対象の不可知性に気づかせる。そこで、語られた「ものがたり」は所与の事実ではなく、想像力によってテキストの中で構築されてくる「読み」によって初めて意味をもつ。テキストの自律性は、まさに New Criticism 以降、読者の参画を促すものであったが、伝記、さらには自伝も、書き手の自由が認められると同時に読み手の自由によって一元的な意味から解放された。伝記・自伝に期待される「ものがたり」は、すでに多様な読みを許容するテキストであるという認識がそこで生まれる。

加えて、Gordon が深い関心を寄せる「女性の言説」、すなわち女性が女性を語り、自身を語る言説が、伝記・自伝というジャンルを通して文学の領域で注目を集めたことがある。1980年代から90年代の初頭にかけてフェミニズム批評は「女性たちが何世紀にもわたって綴ってきた女性の人生の言説に着眼し」、例えば「Sidonie Smith は、1987年に著した *A Poetics Women's Autobiography: Marginality and the Fictions of Self-Representation* で、女性たちがどのように自伝的言説を自分たちの文化的周縁の存在を変えていく手段とし、文学史に参画していくかを模索していくことを通してジェンダーとジャンルの関係性を理論化した (Smith and Watson, p.210)。自身を語る主体としての女性が、「個人の『わたし』と女性のポリティックスの間にある社会的な空間で動き始めた」(同) のだ。テキストの中に「主体としての女性」が顕現化され、彼女たちの視点が、社会や歴史を検証し、捉えなおす契機を与えた。

V. 「女性と表現」を追って：Lyndall Gordon の「女性たちの伝記」

伝記・自伝を文学研究で論じる土壌から、研究者や批評家が「文学における伝記的・自伝的側面」をテーマにした学会—例えば2007年に英国Ulster大学で行われた“Conference on Life Writing”（このときの発表や講演者の寄稿をもとに編集されたのが*Life Writing: Essays on Autobiography, Biography and Literature*, 2010である）—が開催され、広く知見が共有され、多様な問題提起がなされるようになった。Gordonもこのような会議の場で論客として自身の「伝記作品」について語る機会をもち、同時に伝記・自伝研究の最前線の動向を共有していた。とくに彼女が関心を示していたのが、歴史を通底する「女性と表現」であった。「過去の女性たちが遺してきた陰の領域にあるものに、私たちはどのような形を与えることができるのだろうか？」(Gordon, 1995, p.96)と彼女は問う。

アパルトヘイト下の南アフリカでユダヤ系家族のもとに生まれた出自は、Gordonが他者に目を向けるときに絶えず「陰」の領域を意識し続けてきた原点にある。入植者の側でのCape Townでの生活は、「生まれてすぐ死んでしまう命や飢餓、非衛生きわまりない闇に包まれた街で起こる殺人などからは隔絶されていた」(*SL*, p. 16)が、少女時代にはその現実認識さえも遠いものであったことに、過去を回想することを通して直面する。そして家族の歴史に思いを巡らせたときに、自身との繋がりの中でユダヤ人の存在に新たな関心を向ける契機を与えられる。あらためて自身の少女時代を忘却の彼方から引き寄せ、Gordonは歴史の経過を読みこむ。その少女時代を描き出す方法として、彼女は人生半ばで生を終えてしまった3人の友人との関係を*SL*の中心においた。

22歳で南アフリカをあとにアメリカへと旅立ち、そこから全く異なる人生をたどることになったGordonにとって、それは時間と場所の「距離」を以て可能になった自己翻訳によって意味づけられた自己像でもあり、他者との関係性のなかでこそ導かれる人生の物語だった。

Shared Lives: 自伝を伝記で語る試み

Flora, Ellie, Rosie、アパルトヘイト下の南アフリカで共に少女時代を過ごした幼馴染の白人女性たち。病に倒れ、人生半ばでそれぞれの生涯に幕を引いてしまった彼女たちの「人生」は何だったのか？「外」の世界へと、人生の物語の場を脱南アフリカに求めたGordonにとって、彼女たちの人生を物語

ることは、自ずと自身を南アフリカとの関係に引き戻して語ることになる。翻訳の文脈を移動させて対象に異なる意味を与えることは、翻訳論においても重要な要素だが、自己翻訳を試みる Gordon は、自身の人生の展開がなぜもたらされたのか、3人の女性たちの陰の物語を文脈に据えることでその意味を模索する。すでに T. S. Eliot と Virginia Woolf の伝記を書くことで他者を語る言説に取り組み、独自の対象と向き合う方法を見出し、伝記作家として確固とした評価を獲得していた Gordon は、ここでもう一つの課題であった「女性たちの陰の人生」を顕在化させることに取り組んだともいえるだろう。「陰」の物語を語る他者の伝記、しかも自身をその中で語るという意味では、自伝でもある伝記・自伝の試みとなった。

None left any record apart from letters. What, we might ask, shaped these lives in the shadow of possibility that lurked between the certitudes of conformity and those of liberation? Were there forms of sharing as yet unrecorded in the years before women emerged as political ‘sisters’? What unrealized possibilities lie unnoticed behind the silence of women’s lives in the outback of history, biography, and memoir, the standard records of the past? I shall approach this through my own past in South Africa, through diaries, letters, and memories, my own and those of my contemporaries who were, most of them, forced into exile and scattered widely in England, America, Israel, Canada and Australia. (*SL*, p. 7)

ここに明らかに見てとれるのは、残された手紙や日記の断片から、歴史の波のなかにたしかに存在していた女性たちの人生一潰えた可能もふくめて一をどう映し出すことができるかという問いである。その問いを、上記の引用のように、現在進行形で「私」が語る。その「私」の立ち位置は、すでにアパルトヘイトが撤廃された歴史を知る外からの「私」の視点であり、同時に社会の中で限られた居場所しか与えられない女性の現実を経験した内側にいる「私」にもある。この二つの領域をどうすれば繋ぐことができるのか? *SL* が伝記と自伝の両方の領域の言説である所以はここにあるのではないだろうか。

語り手は、したがって物語の「外」と、語られる物語の「内」側を行き来して二つの領域を同じテキストに共存させる。そして「私」は、自分の人生を「語り」の行為を通して発見していく主体として、「陰」の領域にいる女性たちとの“shared lives”「共有の人生」の中に自身の声を記す。

Since I am writing mainly about friends, I shall not dwell on solitude except in so far as it bears on the context of their lives – their too short lives, that drove

too keenly to a self-definition that, to the end, would elude us all. If Flora's end was to become a *Parisienne*, Ellie a therapist, and Rosie a Woman of Today, these labels tell too little. What they leave out, as scientists do in their linear stories of driving discovery, are those experiments that have come to appear irrelevant, and – less distinct – unnoted observations, and – fainter yet – observations not made at all. For Flora, Ellie, and Rosie, were there pauses, like my diary? Or did they feel more insistently than most, a pressure to be mature, to be loved, to be women? (*SL*, p.57)

「共有された人生」をいつときでも経験した Gordon にしか、ほんのわずかの手がかりだけを残して人生を終えてしまった女性たちの姿を描き出すことはできなかった。手紙や会話を「現在」に引き出してくることで、Gordon は彼女たちの「声」を伝えているのだ。たとえば癌で心理学者のキャリア半ばで世を去った Ellie の他者への共感や孤独、いくたびも名前を変えることで自分を変えようとした Flora の自己表現の希求は、Gordon への手紙の中から拾い上げられた「声」であり、「女優」として演じる人生を選んだ Rose が自身の病のなかで娘たちに遺した遺言もまた、かつて学生時代に彼女が書いた詩の記憶とともに *SL* に刻印される。それぞれの人生の展開を具体的に作品から抽出していくことは、本稿全体の射程からも稿を改める必要があるが、少なくとも時代的歴史的枠組みの中で「無名」の人生を終えた女性たちの存在が、「何をなしたか」ではなく、「いかに現実を経験したのか」という視点で描かれた意義は大きい。

Gordon は、自身の人生の展開を 1954 年から 1990 年まで辿りながら、かつての友がそれぞれの人生とどう向き合っていたのかを「ポストアパルトヘイト」の視点から、そして「文学を講じることで自由と人権について行動できる」(*SL*, p. 253) という信念をもった人生を選びとった帰結として記録したのだ。自身は南アフリカ時代に生涯のパートナーとなる Siamon との出会いによって外の世界へと目を開かれ、1 年間のイスラエルでの若者たちの社会主義活動“Habonim”に参画、そして渡米を決断し、結婚生活の中で二人の娘たちを育てながら、文学研究の道を切り拓いた。博士論文の T. S. Eliot 論が起点となり、*Eliot's Early Years* (1977) が翌年の“the British Academy Rose Mary Crawshay prize”を受賞するなど高い評価を得て伝記作家の道を歩みだした。その過程での女性としてのさまざまな葛藤や南アフリカの歴史的的政治的変化への関心が、「陰」に生きた女性の友人たちの声と響き合いながら「共有」されて、個人の物語から多くの他者—とくに女性たち—の「共有された物語」へ

と昇華されている。

献辞には、興味深いことに“Anna and Olivia”という二人の娘の名前が記されている。文筆家となったこの二人のうちのOlivia Gordonは、生まれながらに心臓疾患をもつ息子を出産、困難な手術を経て現在は母親の家の隣家で小学生になったその息子を育てながら、2019年に自身の経験をノンフィクションとして纏めた*The First Breath: How Modern Medicine Saves the Most Fragile Lives*を出版している。そこには障がいをもつ命を与えられた母親としての心情とともに、個人の経験から照射されてくる社会的な問題と意識が明確に示されている。Gordonの伝記・自伝に繋がる軌跡は、まさしく母から娘へと受け継がれた轍だと言えよう。

SLの伝記・自伝の試みは、脱西洋を自明の理として再編されてきた「世界文学」の領域にも連動して、他者を意識化していくことを加速する文学に貢献していると言えるだろう。

Divided Lives: Dreams of Mother and Daughter. 南アフリカに生きた母の肖像

南アフリカでの少女期を起点に始まった人生の展開を、複層的な伝記と自伝を織り込んで作品化したSLから10年近い歳月を経て、南アフリカで生涯を終えた母の回想記*Divided Lives: Dreams of Mother and Daughter* (2014)に取り組み、「女性と表現」というテーマを、今度は娘の視点から母を語る伝記・自伝で追究した。SLでは「家族」として語られた母が、自身も南アフリカの西海岸、人もまばらなKlaverの入植者の娘として生まれ育ったRhoda Pressという一人の女性として描かれる。娘のGordonの記憶の中の母はしかし、冒頭から“I’m to be my mother’s sister because she wants one so.” (DL, p. 1)と記されるように、母と娘の意外な関係を暗示して語られ始める。

伝記的な「事実」よりもむしろ内的なリアリティに迫ろうとするGordonの意思が明確に表れた構成が見てとれる。Gordonが4歳の頃、母はしばしば発作に襲われ(おそらく癲癇ではなかったかとGordonは個人的な会話で仄めかしていたが、伝記では明確に示されていない)、そのたびに幼い娘は急いでくんできたコップの水を母の顔にかけ、それでも功を奏しないときには「母のかばんの中から青い大きなヘアブラシを取り出してきて、彼女の手首をブラシの針でこするのだった」(同, p. 2)。いつ起こるともわからぬ母のこの発作に懸命につき添ったGordonは、娘ではなく、病の不安を抱えるRhodaの面倒をみるsisterとしての役割を負い、その関係はやがて“sisterhood of poems and stories”、すなわち「詩や物語を共有する姉妹、同志のような関

係」(同)へと変化する。母は娘に何度も Emily Dickinson の詩を読んで聞かせたと記されるのだが、奇しくも Gordon は、DL 出版の直前に Dickinson の伝記 *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds* (2010) を著し、さらに興味深いことに Dickinson の詩作の背景に、何かしらの激しい発作や閃光のような強い閃きがあったことに触れている。彼女の関心が、この少女期の母の影響のもとに育まれたと考えるのは、決して的外れではないように思われる。母のもう一人の「お気に入り」が *Charlotte Brontë* であったが、果たして Gordon は彼女の伝記 *Charlotte Brontë: A Passionate Life* を 1994 年に出版している。

Gordon は、「私は、母の人生と表現をつなぐ水路のような役割を果たすように運命づけられていた」(DL, p. 4) と回顧するが、「母はどのようにして彼女の取るに足りない閉ざされた存在と、その後訪れることになる、自身の声が現れる遠い未来がつながることになるのか、一言も語らない」(同, p. 5) と記す。それは、Gordon 自身が伝記を書くことを通して見出す「自伝」のなかに見えてくる答えなのだ。

Gordon は、文学研究者として接することになる多くの文学や作家を往復しながら書き進めていくのだが、“Lyndall” という名前の由来にも、Olive Schreiner の *The Story of an African Farm* が呼び起こされる (Olive Schreiner もまた、伝記作家 Gordon の手になる OS での重要な「対象」の一人である)。

My name comes from Rhoda's other life, called up more fully in the memory-dream she inhabits. The Lyndall of the novel is a curiosity of the veld: a woman shaped by unstoried spaces where the curve of the earth can be seen on the encircling horizon. I pull the book from the shelf and glance at its opening line: 'The full African moon poured down its light from the blue sky into the wide, lonely plain.' Vaguely I take in an embrace of nature and solitude. Rhoda is not particularly drawn to the politics of her heroine's turn to the feminist cause. What matters is her authentic nature: a woman without a mask, rising from a bedrock of stone and bush. (DL, p. 6)

ここで立ち現れてくるアフリカの大地の風景は、のちに無名の詩人となる Rhoda の詩のなかに掬いとられていく。この心象風景、「普遍の風景」こそ、「発作の恐怖の中を突き進んでゆく勇氣」を充たすものであって、「彼女は夢のうち、『空洞のなかに／風が吹き込む祝福／その宇宙の永遠の海原』に怖れを溶解させ、その音を聴く」ことができたのだと理解する (DL, p. 7)。Rhoda は自身の少女の頃に、「蠟燭が灯る子供部屋やそこで語られる父祖の物語、

イディッシュ語の子守唄が、子どもたちに荒野のなかをヘブライ語の聖書の神がともに歩いてくれていると教えこむように、自身の命を導く普遍的な力の源を自然の風景のなかに見出していた」(DL, p. 8)と記される。その「普遍的なもの」が訪れた6歳のときのことを、Rhodaは娘に語った。それは「独り言のように」語られた。

‘I looked across flocks of bushes to where, in the far distance, sun-shafts, like pillars of gold-smoke, moved on the face of the veld. The light and its smoky breath flooded my being.’ For all Rhoda’s readiness to share these memories, she shuts the door on others. (DL, p. 9)

この内的経験は、娘のLyndall (Gordon)にだけひそやかに語られ、sisterhoodを通して記憶として刻印された。

母の「伝記」はこうして彼女の内的世界の記憶から書き起こされ、そこから「母の母たち」すなわち家族の歴史へと時代をさかのぼる「語り」で記される。東ヨーロッパから南アフリカへの入植者となったルーツ、結婚、それぞれの家族、生活、そして時代…。その時間軸の中で、Rhodaは詩を書き、娘に読んで聞かせた。それは「陰」の領域にとどめられた表現であり、人生であった。

そこに、彼女の「詩」に光が当てられる大きな転機が到来する。1952年、Rhoda35歳にして、10歳と8歳の子どもたちの母であった。突然、BBCの取材のためにオリンピックの水泳競技を取材する夫の仕事に同行して、(子どもたちを置いて)フィンランドに旅立つのだ。それは彼女にとって未知の場所への旅立ちであると同時に、女性たちが自らの領域から「表現」を発していく時代に踏み出す経験でもあった。

偶然にも彼女が向かったのはオリンピックの競技会場ではなく、国立美術館、7月の或る水曜日。ガイドはアート批評家のSirkka Anttila。当時フィンランドでは有名な女性画家であったHelene Schjerfbeckの自画像の前でRhodaは足を止める。

Her self-portrait of 1915 bares a face pared down to intense inwardness. She has the unwavering gaze of an observer, similar to the gaze of Katherine Mansfield when she’s fine-drawn and alone, arms folded over her tubercular chest, in a photograph my mother has on her desk. (DL, p.127)

現在形で語られるこの瞬間は、Rhodaの視点で捉えられた瞬間であるように、実は伝記作家であり、語り手であるGordonが描き出した光景に他ならない。想像力によって創出されたこの内面の描写は、そこで起きる一瞬あ

とのドラマツルギーの見事な助走となる。

A viewer amongst the visiting party asks why a sculptor has made a woman's legs absurdly thick. Sirkka hears behind her 'a small, small voice' explaining – 'so marvelous, intelligent', she records that night in her diary – the deliberate disproportions of modernist art. Slowly, she turns a hundred and eighty degrees to see who this is. (同)

Gordon の筆は、女たちの邂逅を静かに、しかし力強く描きだす。美術館で目にした Tyko Sallinen の絵“April Evening”の印象を冒頭において表現した詩— Gordon は、それが美術館を訪れた同日の夜に書かれたものだと推測している—を Rhoda は Sirkka に手渡す。

Patient under the wind lies land

Stripped to the rocks.

One bony tree spreads a jointed hand.

Since Creation this sky knows this land,

This land this sky.

Loose clouds above, knit rocks below,

Only the blizzard between. (DL, pp.127-8. 斜体は原文ママ)

この人類未踏の大地が、観る者を「創造」の原点へと近づけると Gordon は中立の視点での評価を記したうえで、2日後の7月26日に、Sirkka から感動の旨を綴った手紙が Rhoda に届けられた「事実」を明らかにする。深く心を揺さぶられた Sirkka は、詩をフィンランド語に翻訳し、「ケープタウンからの来訪者 Rhoda Stella Press」が、フィンランドの芸術に触れ、「詩のリズムと言葉のなかに、北国の寂寥とした森の神秘的な魂をとらえた」作品を誕生させたことを記事にして *Finlandia Pictorial* 紙に紹介した (DL, p. 128)。

日記の記述や手紙、歴史考証された事実、記事、そして「作家の想像力」で語られる Rhoda の「それから」は、Sirkka に勧められてそのまま旅を続けたラップランドの旅を皮切りに、彼女の「解放の物語」へと急展開してゆく。「30年後に、Rhoda はきっとこう言うだろう。『フィンランドは、私の魂の窓となり、そこから私の上に特別な祝福が降ってきた』と」(DL, p. 132)。その証人が、Gordon だったのだ。

しかし、DL は、Rhoda の成功を追う物語ではない。タイトルが示唆するように、母と娘の人生は分かたれ、母の夢と娘の夢はもはや sisterhood として同じ音色を奏でてはいかない。夫の許しを得てロンドンに赴いた Rhoda

は、Sirkka の紹介で詩のサークルに参加、作品を発表する機会を与えられ、それなりの評価も得る。詩人としての、そして何よりも自由な表現者としての自己実現の道がそこで拓かれたかに見えた。が、南アフリカで二人の子どもたちと暮らす夫は約束より早く帰国を乞う。時代の、そして南アフリカという場所の制約のもとで、Rhoda は帰国を余儀なくされ、その後、詩作を続けることはなかった。「母の『至福の時代』は、36 歳から 39 歳までの間、1953 年から 1956 年にかけてだった」(DL, p.170) と、Gordon は表現者としての Rhoda の人生を冷静に記す。

そして、当時 10 代半ばの Gordon は、母の共感者であるよりもむしろ自身の人生を模索することに意識を向けていった。それは自然な母と娘の自立の「分離」である一方で、終生解けぬ糸のもつほれのように、彼女の意識に影を落としたのではないか。

Rhoda はきっぱりと詩人としての可能性と決別して、南アフリカでヘブライ語の教育を普及する理念をもつ Nahum Levin に共鳴してその活動に深く関わる。ときにイスラエル建国から 7 年、迫害の歴史を負って世界中に離散したユダヤ人たちが、注目を浴びる歴史の幕開けを迎えていたのだ。Gordon は、ユダヤ人としてのルーツをどう考えるのか、やがて深く沈思する時間を経て、母の選択にある種の違和感を感じないではいられない自分に気づいている。Levin の、未来の希望を語るナショナルアイデンティをめぐる演説にも、Gordon は批判の目を向けてこう記す。

What is he *not* saying? This is a question for after years. It's not a question my mother and her friends ask in 1955. What they aren't told is that certain people are denied entry to Israel: returning Arabs with Palestinian passports; gentile wives of Jews; and their uncircumcised sons. This policy will relent to the latter two categories: wives can enter if they convert, and their sons if they submit to circumcision. (DL, p.173)

アパルトヘイトの非人道性、ホロコーストという歴史の負の遺産、自由の国といわれるアメリカで、他者として自らの歴史に関わる問題を客観的に見る経験を得た Gordon は、歴史の転換点で起こる複雑な変化やイデオロギーの問題が自身の人生にも関わっていたことを、伝記で記す。母との別離は、単なる母と娘の人生の岐路としてだけではなく、女性であるがゆえに、そして南アフリカで生きた母ゆえに、重く苦しいものとして Gordon の伝記と「自伝」に翳を落とした。“In the mid-to-fifties my mother changed, changed permanently, and with it, our tie” (DL, p. 177) と Gordon は語る。Levin の死後も、娘に戻っ

てほしいと願う母の思いは、Siamon との結婚と渡米という Gordon の決断を変えさせること叶わず、DL の読者は、そのタイトルの意味を理解する。

結婚後子育てをしながらアメリカで学問を続け、執筆に邁進する Gordon のその後の人生も決して平坦なものではなかったが、他方 Rhoda は個人で聖書の読書会を女性たち相手に開催したり、シェイクスピアの作品をとおして「女性」について議論することを南アフリカで始めていた。そして62歳にして、「人間の定義は『多くの家族のなかにいる一つの家族』だと信じる Rhoda は、反アパルトヘイト活動に参加していた」(DL, p. 269)。女性の目を通して、何年も Sea Point で暮らす女たちの行き場のない生活を見てきた Rhoda は、まず女性たちの居場所を作ろうとしたのだった。それから参政権運動へ、と女性の連帯を広げていったという。彼女のペンの力は、土曜日の朝に開かれる子どもたちのためのクラスに使う物語を書くことに向かい、社会活動のリーフレットや手紙にも発揮されていった。

実に、「女性と表現」というテーマは、かたちを変えながら、ずっとこの母と娘に人生の指針を与えていたのだ。オックスフォード大学の当時5つあった女子大の1つで英文学の講師として職を得た Gordon は、Virginia Woolf を学生たちに講じながら、『『書物が等しくすべての人間たちにとって平等な創造であるように』と語りかける Woolf のあたたかな声』を聴く (DL, p. 254)。そして彼女の優れた Virginia Woolf の伝記は James Tait Black Memorial Prize に輝いたのだ。

そして1987年、23年の別離ののちの再会を果たし、異なる轍を歩んだ母と娘はそれからいくどか老境の時間を共有した。そして人生の終焉に向かう母のそばでかつての詩を再読した Gordon は、「Rhoda の詩は、幻と、試練と、詩篇のような祈りである」(DL, p. 306) と確信する。同じ年の11月2日、Rhoda は帰らぬ人となった。そこから、新たな伝記・自伝が創造されたとと言えるだろう。

結び：現代文学に新たな領域を拓く

「伝記・自伝」に注目して現代文学の可能性を“autobiografiction”という概念で提起する Max Saunders は、「1970年代以降、文学研究において大きな展開を見せた」“life-writing” (伝記・自伝) は、「回想記や自伝、伝記、日記、手紙、そして自伝的な小説」が意識的に作品の中で複層的に取り込まれた結果、「伝記と自伝の間の境界があいまいになってきた」(Saunders, p. 4) と指摘す

る。「自伝」そのものではなく、「自伝的な」言説が「語り」に有効に使われることで、作品世界の主人公の「伝記」がフィクションの中で紡ぎだされる。その源流が、たとえば「*Tristram Shandy* や *Robinson Crusoe*、*Jane Eyre* にも見出せる」(同, p. 8)とするなら、文学の「形式」として、それを“autobiografiction”という概念で捉えるという発想である。そもそもドイツ文学に端を発する「ビルディングスロマン」も、主人公の葛藤と成長がテーマであることに鑑みれば、文学そのものが人間の人生を語る言説である以上、その核に「伝記・自伝」的語りの視点があるのは自明のことであろう。重要なのは、文学作品の分析において、「伝記・自伝」的言説の機能を考察することで、個々の作品の独自性を照射していくことにあると言えるだろう。

そこでようやく、現代文学批評の概念—たとえば Roland Barthes の作者の所在を問う論考“The Death of the Author” (1967) のもつ意味が、あるいは Bakhtin が dialogism という概念で自己と他者の関係性の中に意味が顕現するという理論でもたらした人間観の変化などが、見えてくるのではないか。女性の言説も例外ではない。フェミニズム批評との運動において「女が書く自伝」として光を当てられることになった。

そこから文学史の再読へ、さらに歴史の再読へと道が拓かれた。まさに、Virginia Woolf が「伝記」への関心を起点に、そこから *Orlando* のような autobiografiction を創造し、また「フィクションの真実」に基軸をおいた作品の中に、自身の自伝的要素を織り込んでいったように。Woolf の実験からさらに「モダニズム」後の領野において、Lyndall Gordon は女性たちの足跡を題材に「伝記」を通して新しい実験を続けた。Michael North は、現代を“The Afterlife of Modernism” (*New Literary History*, 2019 所収) で「すでにポストモダンと呼ばれる時代も過ぎ去って、いまや名前を持たない不安のなかにいる」(p. 91) 時代だと言う。その不安の中に、環境問題やネオリベリズムなどの政治的問題が未解決のまま存続している状態を反映するものでもある(同)が、North の指摘は、以下の引用に示唆されるように、「現在が他とは異なる文化的な特質をもっているというモダニズムへの懐疑」を未解決にしたまま、ポストモダン以降、「多様性とあらゆるものとの差異」が乱立するなかで特質など見いだすことはできないという現実を照射するものである(同)。

Thus the double bind imposed on the present by the example of the postmodern: its demise leaves behind the expectation of a successor term while simultaneously undermining our faith in the very habit of defining and naming successive periods.

このように考えると、何がポストモダニズムを通過しながらモダニズムから継承されているのかに光を当てれば、そこからモダニズムの意味を逆照射できるのではないかという議論が成り立つ。たとえば“remodernism”は、モダニズムが現在も進行中の過程にあるという認識であり、また、“hypermodern times”は「新しいかたちのモダニズム」だというように(同, p. 92)。モダニズムを現代の視点で捉えなおす North の論はひじょうに興味深いだが、本来の「伝記・自伝」の展開という論点に戻って指摘できることは、現代批評の文脈においてモダニズムの転回がもたらした変化が、人間の人生の軌跡を追う「伝記・自伝」の転回に引き継がれながら、現在にその水脈を繋いでいるということだろう。その関係性は、Woolf と Gordon を繋ぐことでおぼろげながらもはあるかもしれないが、輪郭を表してきた。Gordon の同世代の女性たちの「伝記・自伝」研究が、現代文学の可能性に貢献していることはたしかだ。偶然とは思えないことに、オックスフォード大学で変革を牽引してきた女性のアカデミアたち—*Auto/biographical Discourses: Theory, Criticism, Practice* の著者 Laura Marcus、Gordon とは異なるアプローチで Woolf 像に迫った Hermione Lee は *Body Parts: Essays on Life-Writing* で伝記論を展開する一方で Elizabeth Bowen や Edith Wharton、Philip Roth の伝記を世に出し、二世代あとは世界文学の Elleke Boehmer が先述のように Mandela の伝記を出版するだけでなく、南アフリカを舞台にした小説の創作を試みている—が、英文学研究の領域で伝記・自伝に新しい風を吹き込んだ。

「わたし」の所在を伝記・自伝の中に見出していくのは、書き手の営みだけでなく、読み手の行為に繋がって、混迷の時代に居場所を探す人間の道標になるのかもしれない。

注釈

本論では原則割注で出典を明記、序文及び説明が必要なものに脚注を付記した。

なお、「伝記・自伝」の表記については、英語では慣例に従って auto/biography とする。

- 1 Gordon, “Woman’s Lives,” ed., John Batchelor, *The Art of Literary Biography*, p. 96.
- 2 同, pp. 96-7. Gordon はここで、Emily Dickinson の詩、“I tie my Hat” から “Bomb” という言葉で彼女が内面に秘めていた情熱に言及している。
- 3 同。
- 4 同。
- 5 Humphrey Carpenter, “Learning about Ourselves: Biography as Autobiography,” p.268. 双方が伝記作家としての自身の考えをもとに、共通のテーマについて行った対談の記録。

- 6 Gordon, “Woman’s Lives,” p. 96.
- 7 同。
- 8 Judith Lutge Coullie, “Engendering a Little More Truth: Gender and Genre in *Shared Lives*,” p.217. *SL* は高い評価での書評で紹介されたが、これもその代表的な書評の一つ。
- 9 Sidonie Smith と Julia Watson の *Reading Autobiography* には、以下のような指摘がなされている。
 “Autobiography [...] became the term for a particular generic practice that emerged in the Enlightenment and subsequently became definitive for life writing in the West.” (p.2)
 また、Laura Marcus も *Auto/biographical Discourse: Theory, Criticism, Practice* (1994) で、“autobiographical tradition”について以下のように述べ、西洋のキリスト教的な影響を指摘している。
 “[T]he positing of Augustine’s Confessions as the first ‘true’ autobiography has become firmly linked with the view that autobiography is both introspective and centrally concerned with the problematics of time and memory. Moreover, the view that Augustine is the founding father of the autobiographical form becomes synonymous with the claim that autobiography is in essence an aspect of Christian Western civilization, could only take shape and develop within this context.” (p.2)
- 10 Jonathan Swift とも親交があった Laetitia Pilkington は 18 世紀のアイルランドの女性詩人であり、自伝も残している。Woolf は彼女の職業作家としての存在とともに人物に興味をもち、この伝記的エッセーを 1923 年にすでに発表している。
- 11 川本静子は、Woolf の「書く女性」をめぐるエッセーの日本語翻訳編集を『女性にとっての職業』（監訳：川本静子・出淵敬子、みすず書房、1994）に纏め、そのあとがきに「ものを書く女の列」が時代の変遷とともに無名から職業作家へ、そして中産階級から労働者階級へと連なっていたことを記している。

「ヴァージニア・ウルフほど、ものを書く女の歴史に一貫して強い関心を寄せつづけた作家はいない。イギリスの場合、女がペンを手にしたのは男よりもずっと遅かった。…中略…だが、私たちの沈黙はいつまでも続かなかった。〈語るべき自己〉をもった人間は、いつかは自己を語りだすのである。十七世紀になると、女たちのなかに芽生えた〈語るべき自己〉はやがて少しずつ沈黙の殻を破りはじめ、と同時に、女たちはものを書くことを通して〈語るべき自己〉を構築していった。…中略…ついで、十七世紀後半アフラ・ベインの登場を皮切りに、ものを書くことによって金を得る道が女たちの前に切りひらかれると、ペンをもつ女の数はさらに増えつづける。そして十八世紀末にはついに中産階級の女たちがものを書き始めるのだ。ジェイン・オースティン、プロンテ姉妹、ジョージ・エリオットなど十九世紀の代表的な女性作家たちは、ものを書く女たちのこうした厚い層から咲き出た大輪の花々である。その後、女のペンは主として中産階級の女たちによって世代から世代へとパトン・タッチされていくが、二〇世紀も三〇年代になると、労働者階級の無名の女たちがペンを通しての自己表現を求め、ものを書く女の列に加わっていくのだ。」(pp. 324-5)

12 Gordon は、巻頭で Woolf の人生の源流は「記憶」であると述べ、幼少期に夏を過ごした St. Ives の波の音や心象風景、そして人生に影を落とした「死者」たちの記憶が作品に織りなされていると指摘する。

As a writer, Virginia Woolf took hold of the past, of ghostly voices speaking with increasing clarity, perhaps more real for her than were the people who lived by her side. When the voices of the dead urged her to impossible things they drove her mad but, controlled, they became the material of fiction. With each death, her sense of the past grew. Her novels were responses to these disappearances. … This biography will follow her creative response to such memories. (*Virginia Woolf: A Writer's Life*, p.4, 下線筆者)

引用・参考文献

I. Primary Sources.

Gordon, Lydall. *Charlotte Brontë: A Passionate Life*. London: Chatto & Windus, 1994.

———. *Divided Lives: Dreams of a Mother and Daughter*. London: Virago, 2014.

———. *Eliot's Early Years*. Oxford: Oxford U. P., 1977.

———. *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds*. New York: Penguin, 2010.

———. *Outsiders: Five Women Writers Who Changed the World*. London: Virago, 2017.

———. *Shared Lives: Growing up in 50s Cape Town*. London: Virago, 2005.

———. *Virginia Woolf: A Writer's Life*. Oxford: Oxford U. P., 1994.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. London: The Hogarth Press, 1929.

———. *Between the Acts*. London: The Hogarth Press, 1941.

———. *Flush: A Biography*. London: The Hogarth Press, 1933.

———. *Jacob's Room*. London: The Hogarth Press, 1922.

———. “Memories of a Working Women's Guild.” In *The Captain's Death Bed* (1950). London: The Hogarth Press, 1981.

———. *Mrs. Dalloway*. London: The Hogarth Press, 1925.

———. *Orlando: A Biography*. London: The Hogarth Press, 1928.

———. “The Art of Biography” (1939). In *The Death of the Moth* (1942). London: The Hogarth Press, 1981.

———. “The Lives of the Obscure.” In *The Common Reader*. Harmondsworth: Penguin, 1938.

———. “The New Biography” (1927). In *Collected Essays*. Vol. IV. London: The Hogarth Press, 1966-67.

———. “The Symbol” (1941). In *The Complete Shorter Fiction of Virginia Woolf*. Ed. Susan Dick. London: The Hogarth Press, 1985.

———. *The Waves*. London: The Hogarth Press, 1931.

———. *The Years*. London: The Hogarth Press, 1937.

———. *To the Lighthouse*. London: The Hogarth Press, 1927.

——. 出淵敬子・川本静子監訳『女性にとっての職業 エッセイ集』（日本語訳のエッセー集として編訳されたもの。）東京：みすず書房，1994.

II. Secondary Sources.

Books:

- Batchelor, John. Ed. *The Art of Literary Biography*. Oxford: Oxford U. P., 1995.
- Boehmer, Elleke. *Nelson Mandela: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford U. P., 2008.
- Bradford, Richard. Ed. *Life Writing: Essays on Autobiography, Biography and Literature*. London: Palgrave Macmillan, 2010.
- Gordon, Olivia. *The First Breath: How Modern Medicine Saves the Most Fragile Lives*. London: Bluebird, 2019.
- 早川敦子. 『翻訳論とは何か：翻訳が拓く新たな世紀』東京：彩流社，2013.
- . 『世界文学を継ぐ者たち：翻訳家の窓辺から』東京：集英社，2012.
- Hume, Kathryn. *Fantasy and Mimesis*. London: Methuen, 1984.
- Lee, Hermione. *Biography: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford U. P., 2009.
- . *Body Parts: Essays on Life-Writing*. London: Chatto & Windus, 2005.
- Marcus, Laura. *Auto/biographical Discourses: Theory, Criticism, Practice*. Manchester: Manchester U.P., 1994.
- Michaels, Anne. *Fugitive Pieces*. New York: Vintage, 1996.
- Saunders, Max. *Self Impression: Life-Writing, Autobiographical Fiction, & the Forms of Modern Literature*. Oxford: Oxford U. P., 2010.
- Schreiner, Olive. *The Story of an African Farm*. London: Chapman and Hall, 1883.
- Smith, Sidonie and Julia Watson. *Reading Autobiography*. Minneapolis: U. of Minnesota Press, 2010.

Articles:

- Carpenter, Humphrey. “Learning about Ourselves: Biography as Autobiography.”
www.oxfordscholarship.com/10.1093/acprof:os97801982894.003.0018. (09 July, 2019)
- Coullie, Judith Lutge. “Engendering a Little More Truth: Gender and Genre in *Shared Lives*.” In *Life Writing*, Vol.11, No.2, Routledge, pp. 217-30.
<https://dx.doi.org/10.1080/14484528.2014.888608> (09 July, 2019)
- North, Michael. “The Afterlife of Modernism.” In *New Literary History*, Vol. 50, No. 1, Winter 2019, Johns Hopkins U. P., pp. 91-112.
- Rossi, Cecilia. “Translation as a Creative Force.” In Harding, Sue-Ann and Ovidi Carbonell Cortes eds., *The Routledge Handbook of Translation and Culture*, Routledge, 2018, pp. 381-97.
- Schinto, Jeans. “*Fugitive Spring: A Memoir* by Deborah Digges; *Shared Lives: A Memoir* by Lyndall Gordon.” In *The Women’s Review of Books*, Vol..9, No. 10/11 (Jul., 1992), Old City Publishing, Inc., pp. 23-4.
<https://www.jstor.org/stable/4021329> (09 July, 2019)